



Newsletter

The University of Tokyo Center for Pacific and American Studies

Vol.6 No.2 March 2006

巻頭言：斎藤眞先生とアメリカ太平洋地域研究センター

東京大学・スタンフォード大学夏期アメリカ研究セミナーを回顧して

斎藤眞…………… 1P

斎藤眞先生の文化勲章ご受章をお祝いする

遠藤泰生…………… 2P

油井大三郎先生・瀧田佳子先生ご退職にあたって

感謝とお別れの言葉

油井大三郎…………… 4P

CPASとアメリカ女性研究セミナー

瀧田佳子…………… 4P

リヤカー去りし後：瀧田先生と油井先生をお送りする

能登路雅子…………… 5P

2005年シンポジウム

越境するアジア系アメリカ人の世界…………… 6P

研究セミナー参加記

Probationary Americans

エドワード・バク教授セミナー参加記

佐々木剛二…………… 8P

Text and Context in H.B. Stowe's *Uncle Tom's Cabin*

デイヴィッド・ホール教授セミナー参加記

佐久間みかよ…………… 9P

スタッフエッセイ

関西圏の大学図書館等の視察

渡邊貴子…………… 10P

東京アメリカンセンター訪問記

森中真弓…………… 11P

柴田元幸先生サントリー学芸賞授賞を記念して

特別寄稿：現代日米の文学

柴田元幸…………… 12P

2005年度研究活動報告…………… 13P

巻頭言：斎藤眞先生とアメリカ太平洋地域研究センター

東京大学・スタンフォード大学夏期アメリカ研究セミナーを回顧して

斎藤 眞



このアメリカ太平洋地域研究センターの特色の一つとして、その開放性を上げることができよう。制度的には駒

場、大学院総合文化研究科所属であり、事実、管理・運営の方は駒場の先生方、職員方のお世話になっている。しかし、各学部を代表する委員よりなる運営委員会があり運営方針などについてなど話し合いが行われていよう。ことに利用という面では、学部を問わず、広く開かれており、東大以外の方にも、利用されている。さらに、その開放性は、センターの書庫の開架制にもよく示されている。時に思いがけない本を見つけ、つい立ち読みしたりする。その上、小さな机と椅子との組み合わせが、いくつか備えてあり、書架から引っ張り出した本のノートを取ったりするのに便利である。

とかく閉鎖的と思われがちな東大の中にあって、センターの、この開放性はどこからきているのであろうか。あえて推察すれば、少なくともその一つの要因として、このセンターの背景に、場所は本郷であったが、東京大学・スタンフォード大学夏期アメリカ研究セミナーの存在があったことではなかろうか。このセミナーの起こりは、当時の東大総長南原繁先生が、教育関係の会議で1949年アメリカに行かれ、帰途スタンフォード大学のスターリング総長との話し合いで、アメリカ研究のセミナーを東大で開くことが合意されたことにあるのは、よく知られている。

ただ、その背景には、南原先生の同僚にして親友、日本の学術的アメリカ研究の創始者といえる高木八尺先生が同年渡米され、いくつかの大学を視察され、学際的（interdisciplinary）研究、また地域研究（area studies）がアメリカで盛んであることを知り、帰国後、日本でもその必要性を示唆されていたこともあろう。高木先生が学際的な地域研究の重要性について、私などにまでよく話して下さったことを思い出す。先生ご自身は1950年春東大を定年退職され、同年夏のアメリカ研究セミナーに直接関係することは一切遠慮されていたが、影ではやはり大きな役割をされていた。

ところで、このアメリカ研究セミナーの運営は、各学部から選ばれた実行委員が担当したが、第一回目、1950年度の委員長は文学部宗教学担当の岸本秀夫教授がなされた。岸本教授は狭い意味ではアメリカ研究者ではないが、ハーヴァード大学での研究期間も長く、英語が達者で、アメリカ人講師との交渉も旨く、かつ日本側の意見をまとめることも巧みであった。同年春助教授になりたての私も、政治部門担当の委員として勤めさせられた。委員会は総長室で開かれ、総長を交えてけっこう喧々譁々の議論が行われた。そこにも、必要に迫られてだが、学部の壁をこえた自由な雰囲気があったのを覚えている。

そのセミナーの始まった頃、1950年代は外国書の購入はまだ困難な時代で、セミナーの一つの貢献は、アメリカ研究関係の図書を購入し、セミナー参加者が自由に閲覧できるようにしたこと

である。1956年8月10日、7年続いた第一期セミナーが一応閉じる時、矢内原忠雄総長はセミナー終了の挨拶を英語でされているが、その中で次の如く述べられている。すなわち「7年のセミナーを通じ、アメリカ研究関係の貴重な書籍が集められた。われわれとしては、将来さらに集積し、アメリカ研究の権威あるライブラリを建設したい。そのライブラリは、この大学だけではなく、日本全国の学者に、学生に開放されるようにしたい。そのような計画こそ、これまでのセミナーの成果と経験とを活かし、本大学におけるアメリカ研究の事業を、組織的に継続させてゆくものと考えている」と。

少し長い引用になったが、まさしくアメリカ研究資料センターは、本大学のアメリカ研究の一つの拠点であるのみならず、全国のアメリカ研究者へ開放され、利用されている。個人的な話で申し訳ないが、1950年の第一回東大・スタンフォード大学アメリカ研究セミナーでは、助教授になりたての私は、実行委員会の文字通り末席を汚し、中屋健一

先生に叱咤されつつ走り使いをし、また訳が分からないまま、政治部門の日本側の責任者になった。まだ外国本の入手の困難の時、セミナーの資料が珍しく、取り出しては、読むというより、よく見、さわったものである。そこに、地域研究としてのアメリカ研究が、なんとなく肌で感じられたのを覚えている。

なお、話しは変わるが、このアメリカ研究セミナーが、狭義のアメリカ研究の枠をこえて、広く1950年代の日本の学界に寄与したものに、日本で遅れていた社会科学の理論研究を促進させ、深めた面もある。例えば、1954年には文化人類学者のクラックホーン、1955年では政治理論家のハロルド・ラスウェル、1956年にはなんとロシア法の専門家ハザードがアメリカ側担当者として見えた。おそらく経済部門ではアメリカの経済というより、経済理論の専門家の方が多かったのではなかろうか。それらのことが、戦後日本の社会科学理論の発展に寄与し、アメリカ研究セミナーの一つの大きな存在理由ともなっていたと思う。



夏期アメリカ研究セミナー実行委員（左端が斎藤先生）

斎藤眞先生の文化勲章ご受章をお祝いする

遠藤 泰生

東大名誉教授であり国際基督教大学平和研究所顧問である斎藤眞先生に、2005年11月3日、文化勲章が贈られま

した。文化人の最高の榮譽とも言われる文化勲章が本アメリカ太平洋地域研究センター（CPAS）と縁の深い斎藤眞

生に贈られたことを、スタッフ一同、心からお慶び申し上げます。

斎藤先生とセンターの間には長く深

い歴史があります。まず1950年から56年まで続いた東京大学・スタンフォード大学夏期アメリカ研究セミナーの運営に先生は積極的に携われました。今回先生ご自身がお書きになった文章にもそのことを記されておられます。この夏期セミナーで収集した資料を保管するために東京大学が全学的な協力体制を敷いて設立したのが、現在のCPASの前身である、アメリカ研究資料センターでした。ということであれば、斎藤先生は、CPASのファウンディング・ファーザーズのお一人であられたということになります。



東京大学・スタンフォード大学夏期アメリカ研究セミナーの様子を伝える貴重な写真が何枚か残されています。その写真を拝見すると、法学部に就職されたばかりの小柄な斎藤先生のお姿が目には焼き付きます。現在よりは少し神経質そうな、遠くの何かを射抜くような鋭い眼差しで先生は写真のこちら側をみつめておられますが、それは同時に、戦後の日本社会がアメリカ合衆国というかつての敵国に向けた視線であったのかもしれません。終戦直後に発刊された高木八尺著『アメリカ』（1948年）の結語には、「人類社会の運命を荷う指導的国民たるアメリカ」という極めて印象深い言葉が記されていますが、その高木先生の薫陶を受け、

やがて日本のアメリカ研究の先頭に立ちとうとされていた斎藤先生の眼差しの先にも、「人類社会の運命を荷う」合衆国の政治と外交が横たわっていたに違いありません。東京大学法学部に在職された間に刊行された『アメリカ外交の論理と現実』（東大出版会、1962年）、『アメリカ政治外交史』（東京大学出版会、1975年）、『アメリカ現代史』（山川出版社、1976年）、『アメリカ史の文脈』（岩波書店、1981年）という著作の流れが、何よりそのことを物語っているのではないのでしょうか。

東京大学を退官されたのち斎藤先生は国際基督教大学で教育と研究に携われました。ここでもアメリカ政治外交の現在を歴史的に読み解く作業を先生は続けられましたが、長年強い興味をお持ちであったアメリカ建国史の研究に以前より力を注がれ、年月をかけて熟成されたその歴史解釈を一冊の大著にまとめられました。『アメリカ革命史研究——自由と統合』（東京大学出版会、1992年）こそその成果であり、日本におけるアメリカ革命史研究の金字塔の一つとして今もそびえ立ちます。政治文化概念の空間概念への置き換えを通してアメリカ独立革命の立体像を描いてみせるなど、先生独特の華麗なレトリックが詰まったこの書は斎藤史学の真髄を伝える一作であり、また、独立革命に考えをめぐらす楽しさをあらゆるレベルの研究者に伝えるアメリカ研究の古典となっています。そのご著書をまとめられる過程においてセンターの蔵書もいくらかお力になれたのではないかと我々は自負しております。

センターの蔵書と斎藤先生の縁に限って言えば、二つ、記し忘れてはならないことがあります。一つは、「アメリカ研究入門書」の棚がセンター閲覧室に設けられていることであり、もう一つは、戦前の日本で刊行された日本人のアメリカ論がセンターの代表的コ

レクションの一つに成長していることです。まず「アメリカ研究入門書」の棚について申し上げますと、この棚は、斎藤先生からのご助言も踏まえ、アメリカ研究を志す初学の学生にこの分野の基礎的邦語文献を紹介する目的で設けられました。センター参考閲覧室の入り口横にひろがるこの棚は、アメリカ研究に関する邦語文献の数が急増した現在でも、その内容を更新しつつ、毎年多くの学生の目を惹き付けております。戦前に日本で刊行された日本人のアメリカ論については、これもまた斎藤先生からのご助言等を踏まえ、古書店から送られる目録を丁寧に探りながら未所蔵図書を購入に努め、さらに佐伯彰一先生ほかの先生から貴重な蔵書の寄贈を受けた結果、一千冊に迫るコレクションを現在では形成するに至っております。中には国会図書館が所蔵しない図書もあり、戦前の日米関係や日系移民の歴史を研究される方たちからも近年大きな注目を浴びるようになりました。斎藤先生の史料収集への鋭い直感と教育への幅広い視野がこれらの蔵書の形成に大きな力を与えたことは間違いありません。

最後となりますが、現在においてもセンターの所蔵資料を最も頻繁にお使いになる研究者が斎藤先生であることを記しておかねばならないでしょう。春夏秋冬を問わず、先生は、新着雑誌の棚の入れ替えや蔵書の変化を穏やかに見つめておられます。また、借りた本は必ず期日までに返却されます。延滞をされることはありません。センターにとっての最大最良のリピーターが斎藤先生であるといっても過言ではないのです。文化勲章の受章を司書たちまでもがお祝い申し上げるのはそうした理由からです。今後とも先生には利用者として、また、指導者として、センターとの長く深いお付き合いを続けていただきたいと願っております。

油井大三郎先生・瀧田佳子先生ご退職にあたって

感謝とお別れの言葉

油井 大三郎



昨年12月に60歳を迎えたのを機に、駒場を去ることになりました。1996年に私が一橋大学からの移籍を決断する際に最大の決め手となったのは、日本におけるアメリカ研究の拠点的な意味をもつアメセンの存続に誰かが尽力しなければならないという思いでした。以来10年間、私なりに微力を尽くしてきたつもりです。1997年のアメセン発足30周年記念行事、約60名もの研究者の皆さんの協力をえて5年間実施した「米国太平洋変動」の大型科研プロジェクト、そして2000年4月からのCPASへの改組実現、そして2004年からの国立大学の法人化という荒波への対応、本当にめまぐるしい10年間でした。

ほとんど自分自身の研究は棚上げ状態でしたが、大型科研や改組の申請書を何度も書く過程で、社会的な意義のより大きい研究課題は何か、センターの個性を生かす道は何か、といった問題を強く意識するようになり、自分の学問的な関心が広がった感じがしています。とくに、「太平洋世界」の中で米国を相対化してみる試みは、大型科研プロジェクトに結実し、最終的には二回の国際シンポジウムを経て、『変貌するアメリカ太平洋世界』と題した6巻本に結実することがで

きました。

その結果、太平洋世界のように、政治体制上の差異や経済格差だけでなく、文化や文明の違いがある場では「異文明間地域研究」といった新しい方法の開発が不可欠であると痛感するようになりました。その思いは、2001年の9.11事件で一層強まり、翌年の国際シンポジウムで米国とそれ以外の地域間にみられる深刻なパーセプション・ギャップの原因が集中的に議論され、その結果、*Crossed Memories*という報告書に結実したわけでした。

また、マサチューセッツ工科大学のジョン・ダワーさんが推進しているVisualizing Culturesのプロジェクトに協力して、2004年の秋にペリー像の日米比較展を美術博物館で実施したのも、CPASとしては初めての試みでしたが、文明の差異を画像を通して自覚化するという実験は、「異文明間対話」の方法を考える上でも示唆に富むものでした。

昨年10月から思いがけず日本学術会議の会員に任命され、地域研究委員会のとりまとめ役を仰せつかることになりましたので、今後も形を変えて、この「異文明間地域研究」の方法開発を考えてゆきたいと思っています。

また、図書館の維持・発展にも様々な苦労がありました。CPASの図書館は文部省からの補助だけでなく、アメリカ研究振興会などの外部資金の助成によっても発展してきただけに、絶えず東大外の研究者、院生、学生にも開かれた機関として機能してきました。年間で延べ5000人もの利用者のある図書館であるだけに、継続雑誌や図書を定期的に購入し、専門図書館としての機能を維持し続けることは予算的にも、人的にも大変でした。

利用者だけの立場であった頃は、所定の書架に求める本があるのは当然のことと考えていましたが、実際CPAS図書館の管理的な仕事をしてみると、現場の事務を支える方々の苦労が並大抵ではないことが痛感されました。購入本の発注、整理、登録、書庫への配架、定期点検、破損本の修理・製本、貸出・返却のチェッ

ク、マイクロ・リーダーの補修・・・等々、こうした現場の下支えがあつてはじめて、利用者は当たり前のように求める本を手にすることができることが痛感された次第です。

こうした経過を振り返ってみると、ご協力いただいた様々な方々に対して改めて感謝を申し上げるとともに、CPASの新たな発展に期待する次第です。

CPAS とアメリカ女性研究セミナー

瀧田 佳子



アメリカ太平洋地域研究センター（かつてのアメセン）がこれまでおこなってきたさまざまな研究活動のなかで、一つの重要なテーマとして取り組んできたものにジェンダー研究がある。これはASA（アメリカ学会）、OAH（アメリカ歴史家協会）などの会長を務められた女性史研究の第一人者リнда・カーバー教授の熱意と友情からごく自然に始まったように思う。その頃教養学部で私は同僚たちと性差文化論という主題科目をスタートさせ、新しい知の文理科横断的リレー講義に教師も熱中していた。

センターのセミナー室は、訪れる著名な研究者をなごませる独特の雰囲気があ

った。聴衆であふれたナンシー・コット教授のセミナーも、ホワイトボードを使ってゼミの授業のようだったヴァレリー・マツモト教授も、そのほかすべての講演者は参加者からの質問に対し、最新の研究動向までも示された。今思い出してもまことに贅沢な研究会だった。

そのようなわけでセンターがアジア太平洋地域の構造変動とアメリカに関する大型科研プロジェクトにのりだしたとき、ジェンダーは文化接触・文化融合班の一つの柱となることができたのである。多文化主義、土着、ジェンダーの視点からアメリカを太平洋世界のなかに見る試みはもっぱら日米関係を考えていた私自身の姿勢に変革をせまるものであった。宗主国の伝統とアメリカの影響が交じり合う、太平洋地域の文化変容は今後も興味の対象となるであろう。

駒場を去るにあたって思い出すことは限らないが、センターのさらなる発展を願いつつ、今後は「駒場卒業生」としてセミナーに出席させていただきたいと思っている。

クライストチャーチにて 瀧田 佳子

リヤカー去りし後： 瀧田先生と油井先生 をお送りする

能登路 雅子

大学キャンパスの3月はいつも別れを惜しみ、門出を祝い、時の経過というも

のをしみじみとを感じる季節です。しかし、今年はアメリカ太平洋地域研究センターに身を置く者にとって、瀧田佳子先生と油井大三郎先生という長年にわたってセンターの牽引力として活躍されたお二人の教授がご退職されることになり、衝撃と寂しさがひとしおの感があります。

ご存知のように瀧田先生は1980年代始め以来、駒場の英語教室の主戦力でいらしたと同時に当センターをアメリカ研究資料センター時代から陰となり日向となつて支えてこられました。センターの運営委員としてご尽力されたことはもちろんのこと、特にアメリカ文学や女性研究に関するセミナーやシンポジウムの企画において、卓越した指導力を発揮されました。全体的には男性が圧倒的に多い駒場キャンパスにあって、アメリカ研究という専門分野や図書館機能をもつ当センターは比較的女性色が強いという特徴がありますが、そのようななかで瀧田先生が女性教授として心強いロールモデルをお示しくださったことは大きな意味をもつものでした。

私自身も大型科研プロジェクト「アジア太平洋地域の構造変動におけるアメリカの位置と役割に関する総合的研究」の瀧田班「文化接触・文化融合」の一員として参加させていただき、テーマや研究方法で悩んでいる折にも、瀧田先生から寛大かつ的確なアドバイスをいただきました。先生ご自身のアメリカ文学・比較文学のご研究をまとめられた『アメリカン・ライフへのまなざし』はセンターの研究叢書として2000年に東京大学出版会から出版されましたが、特に日米文化交

流についての幅広い分析には多くを学ばせていただきました。

研究叢書はアメリカ研究資料センターが研究センターに改組を果たすためには「リヤカー一台分の業績が必要」という至上命令のもとで始められた出版事業でした。こんな無茶苦茶な目標を達成されてしまったのが、1996年に駒場に颯爽と登場された油井大三郎先生です。「リヤカー」が夢に出るほどのトラウマを感じられた先生は最近の教養学部報で述懐されていますが、周囲にいた私たちから見れば、先生は涼しい顔をされながら、壮大なヴィジョンと完璧な計画性のもとでセンターの社会的評価の確立、学内外の60名の研究者を結集させた大型科研プロジェクトの推進、アメリカ太平洋地域研究センターへの改組という、どれひとつをとっても常人を打ちのめすであろう大事業をプロジェクトX、Y、Zとして着々と成功に導かれました。これを短い期間に成就されたことはまさに超人的な偉業としか思われませんが、油井先生の文字通り油が乗り切った10年間に駒場で一緒にさせていただいたことは私たちにとり、このうえない幸せでした。

油井先生と瀧田先生という今日のセンターの骨格を築かれた重鎮が駒場を去れることで、センターの歴史は一時代の幕を閉じようとしています。両先生の並々ならぬご苦労とリーダーシップに改めて感謝の念を捧げるとともに、業績と思い出を一杯に積んだリヤカーを見送ったあとの空白感を新たな可能性につなげることが私たちに残された使命であると感じています。



1993年 瀧田先生（中央）とアメリカ科の教員、学生のみなさん



1998年 油井先生（前列左から2番目）とアメリカ研究資料センタースタッフのみなさん

2005 年シンポジウム

越境するアジア系 アメリカ人の世界

東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センターでは、2005年9月3日、4日の二日間にわたり、「越境するアジア系アメリカ人の世界」と題して国際シンポジウムを開催致しました。

本年度は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）「アジア系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」の最終年度にあたり、このシンポジウムは

基盤研究（A）「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」、21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」、アメリカ研究振興会、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻です。

初日の公開シンポジウムは、東京大学駒場キャンパス18号館ホールで、同時通訳をつけ、一般に公開して行いました。残暑厳しいなか会場を埋め尽くすほどの聴衆が詰めかけ、海外からの研究者を交え熱気に満ちた議論が行われました。

二日目、午前 は “Asian American



9月3日熱心に聞き入る聴衆

Immigrants and Boundaries of Race”、午後 は “New Asian American Communities and Identities” と題して、各分野の専門家によるクロードセッションを18号館コラボレーションルームで行いました。あらかじめ参加を募った日本国内の50数名の研究者と、パネリストである内外の研究者12名による質の高い議論が時間いっぱい繰り広げられました。

両日のプログラムは次のとおりです。

◆CPAS International Symposium 2005

The World of Transnational Asian Americans
「越境するアジア系アメリカ人の世界」

<公開シンポジウム>（同時通訳つき）

日時：2005年9月3日（土）

14：00～17：00

会場：東京大学駒場キャンパス

18号館ホール

プログラム：

司会…瀧田佳子

（東京大学大学院総合文化研究科 教授）

挨拶…山本泰

（東京大学大学院総合文化研究科 副研究科長）

報告…

○油井大三郎

（東京大学大学院総合文化研究科 教授）

「環太平洋のひとの移動

—その過去と現在」

○Henry Yu

（UCLA歴史学部/ブリティッシュ・

コロンビア大学歴史学部 助教授）

“Then and Now: Comparing Contemporary and Historical Asian Migrants”



9月3日公開シンポジウムのパネリスト

その集大成となりました。

主催は、アメリカ太平洋地域研究センター、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）「アジア系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」、後援は文部科学省科学研究費補助金



9月3日レセプションの様子



9月4日専門家会議の様子

○吉原和男

(慶応大学文学部 教授)

「東南アジアからの中国系新移民
—その環太平洋ネットワーク—」

○Eui-Young Yu

(カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校社会学部、
コリアンアメリカン/コリア研究センター 教授)

“Changing Dynamics of the Korean
Community in the US, 1990-2000”

コメンテーター…能登路雅子

(東京大学アメリカ太平洋地域研究センター長)

< 専門家会議 > (英語)

日時：2005年9月4日 (日)

10:00 – 16:30

会場：東京大学駒場キャンパス

18号館コラボレーションルーム

プログラム：

Morning Session: Asian American Immigrants
and Boundaries of Race

Chair: Yasuo Endo

(University of Tokyo)

Panelists:

○Robert Lee (Brown University)

“Christian or Heathen? Late-
19th Century Chinese American
Intellectuals’ Debate: Religion, Social
Ethics and Modernity”

○Eiichiro Azuma

(University of Pennsylvania)

“A Trans-border Japanese Immigrant
Community in U.S. and Mexican
Californias”

○Izumi Hirobe (Hokkaido University)

“Naturalization Cases of Asian
Immigrants”

Commentator: Evelyn Hu-DeHart

(Brown University)

Afternoon Session: New Asian American
Communities and Identities

Chair: Yujin Yaguchi

(University of Tokyo)

Panelists:

○Mari Sekiguchi

(Asia University, Adjunct)

“‘American Desi’: Multiple Identities
among Contemporary Asian Indians”



専門家会議 午前の部

○Hideki Harajiri

(Shizuoka University)

“Meanings of Modern and Post-modern
Phenomena: Formation of Trans-
national Communities of Korean-
Chinese”

○Miya Suga

(Tokyo Gakugei University)

“Diversity within ‘Nikkei’: The
Demographic Background and
Multiple Identities of the ‘Japanese
Population in the U.S.’ ”

○Hiroko Furuya

(Research Fellow, JSPS)

“Being American is to be Vietnamese:
Remittances, Homeland Travel, and
Anti-communist Activities”

Commentator: Edward J. Park

(Loyola Marymount University)

シンポジウムでの各報告は未発表の
論文数点を含め、CPAS紀要『アメリカ
太平洋研究』6号(2006年3月)の特集
として掲載されると同時に、Daizaburo
Yui, ed., *The World of
Transnational Asian
Americans* (CPAS,
University of Tokyo,
2006)として刊行され
ます。

(梅崎 透)



専門家会議 午後の部

研究セミナー参加記

Probationary Americans: How Contemporary U.S. Immigration Policies are Reshaping American Society

エドワード・バク セミナー参加記

佐々木 剛二



2005年12月20日にアメリカ太平洋地域研究センターで行われたエドワード・バク先生の講演では、1990年代以降に生じた合衆国における移民受け入れ政策の大きな転換とその帰結について、20世紀以降の移民政策との比較のもとに論じられた。

自らも移民1世として若き日に韓国からアメリカに渡ったバク教授は、かつて自宅前で撮影したという家族写真をプロジェクターで見せながら、「私たちのような家族はもう絶対にアメリカには移民しないだろう」と述べた。なぜだろうか？教授はそれが、1990年代以降の移民政策の転換によるものだという。

アメリカは建国以来、世界中から多くの移民を受け入れてきた「移民の国」である。確かに、19世紀後半から、20世紀半ばまでは、合衆国内の人種的階層関係を反映した国ごとの移民受け入れの割り当て人数が規定されるなど、排外的な政策が採用されていた。しかし、1965年の法改正によって、こうした人種に基づく

選考は取り払われ、「1882年以来のアメリカの歴史において最も包摂的(inclusive)な移民体制」が確立することとなった。これは移民の研究者にとっては、人種の壁を取り除いた包摂的政策の頂点、アメリカ移民政策における「歴史の終わり」と思われた、という。

だが、1970年代から1980年代にかけて強まった合衆国内の経済的不安は、移民法への根本的な変容をもたらした。アメリカは、永住の法的権利に基づくかつての「移民の国(immigration country)」から、「非移民」の「一時的労働者」を中心とする「移住の国(migration country)」へと、大きく変化したのである。この移住という言葉は、人々にとってアメリカが最終的な定住地ではなくなったことを含意していると言ってよいだろう。こうした変化は1990年代に顕著になったという。

バク教授が説明する、この大きな政策の転換のいくつかの特徴は以下のようなものである。まず、第1に、かつては「技術」や「資本」という複合的な要素が関わっていた永住権の付与のプロセスが、より明白に「資本」と「投資」に基づくものとなった。「投資」と「雇用」を目的とする富裕層や、学位を持つエンジニアなどへ発行されるビザがかつてないほど増加している。

第2に、日本をはじめとする外国企業との競争に打ち勝つために、大量の「一時的労働者」を積極的に取り入れる政策が採られた。特にハイテク関連の企業は、もはや一時的労働者なしでは競争力を保つことができないのである。この帰結として、大規模な移民体制のプライヴァタイゼーションと経済競争のための雇用のフレキシブル化が生じた。さらに、1980年代には平等であったアメリカ出身者と移民の間の福祉サービスの享受に関する権利に、大きな差別が生じるようになった。一時労働者は、「移民」というよりも、むしろ「外国人」としての扱いを受けるようになったのである。

上のように一時ビザで入国する、投資家、一時労働者、技術労働者たちに代表される移住人口の富裕層を占めるのは、

圧倒的にアジア系である。しかも、1984年には全体の85%を占めていた、家族単位の移住者の受け入れは2000年には全体のたった20%を占めるに過ぎない。つまり、今やアジア系の人々は、非移民の一時的労働者として単独で入国しているのである。永住権を求めて、家族とともにアメリカへ渡る典型的なアジア人のイメージ——つまり冒頭の写真が示したような移民家族の姿——は、もはや現実を反映したものとは言えないのである。

バク教授は、1990年代以降の移民政策の第3の特徴として、犯罪に関わった移民を国外追放する「除去(removal)」の措置が採られるようになったことを挙げる。この除去政策の特徴は、単なる国外追放(deportation)とは異なり、裁判そのものが強制送還後に行われる点にある。1984年に4000件程度に過ぎなかった国外追放の件数は2004年にはたった1年の間に16万人に上っている。今やアメリカは世界最大の犯罪者輸出国となっているのである。この結果、ロサンゼルスやニューヨークのメンバーが世界中の都市に大量に送還されているだけでなく、幼いときからアメリカで育つ若者たちが、飲酒運転や銃所持などで「出身国」へ追放されている。

バク教授は、国家が裕福な企業家や技術者のみを求め、貧しく教育を得られぬ人々を排除しているような体制が、常識的な論理(a logical common sense)と言えるのか、と問いかけて講演を締めくくった。

バク教授のお話を聞いて、数年前、何車線もあるカリフォルニアのハイウェイを、形も値段も速度も違う自動車が思いおもいの目的地に向かって走り続けている光景を目にしたことを思い出した。相対速度が減り、車同士が近づけば、見知らぬ家族と視線を交わすこともあるが、そのうち別のルートに入ってそれぞれの車は遠く引き離されていく。何気ない風景が強烈な印象を与えたのは、自由と速度の増大が、共同体の乖離や精神的な孤独と表裏の関係にある、と理解できたからだと思う。アメリカが大量に生産する「非移民の移住者」とは、せいぜいこんな風にすれ違いざまにアメリカと出会って

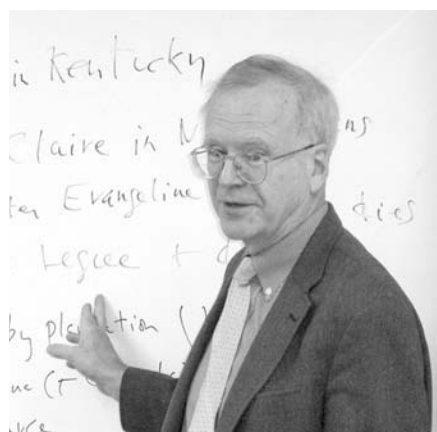
去っていくことを余儀なくされる人々のことかもしれない。それは、国家の利益と引き換えに人間同士の結びつきが失われつつある構図である。自由に潜む孤独を克服し、他者を襲う悲劇をわが身のごとく追体験するみずみずしい共生感覚——デューイ的な「公衆」のありかた——を国境の内と外に取り戻すことこそ、新世紀のアメリカの大きな課題といえるのではないだろうか。

(ささき こうじ：東京大学大学院)

Text and Context in H.B. Stowe's *Uncle Tom's Cabin*

デイヴィッド・ホール セミナー参加記

佐久間 みかよ



ハーバード大学神学部のデイヴィッド・ホール教授の来日に際し、2006年1月11日のアメリカ太平洋地域研究センターを皮切りに、上智大学アメリカ・カナダ研究所、初期アメリカ学会、国際基督教大学キリスト教と文化研究所において連続講演が行われた。17世紀ニューイングランド宗教史の研究を中心にすすめてきたホール教授は、近年においては、“lived religion”の研究をテーマとされている。今回の講演ではストウ夫人の『アンクル・トム的小屋』をとりあげ、テクス

トとコンテキストの両面から考察するというものであり、この作品にこめられたストウ夫人自身の宗教観を彷彿させる箇所注目するという“lived religion”の探求の一面が窺われるものであった。ホール教授自身が重視する、テキストのvoiceに関しては、『アンクル・トム的小屋』のストーリーラインからのvoiceと作者ストウ自身のvoiceという様々なvoiceの説明がさながらchordとなって耳に響いてくるような印象すら受けた。ホール教授の関心事のひとつであるliteracyとは、最近では情報処理能力の面に重点がおかれているが、感動を起点にした書物への興味がまずあるものだとして改めて考えさせられた。

講演のタイトルは、“Text and Context in H.B. Stowe's *Uncle Tom's Cabin*”で、授業でこの作品をどのように教えるかという主旨ですすめられた。以下に、講演の内容を紹介したい。作品自体の名は知られていても、実際に読まれることの少ないテキストである一面に、アンクル・トムという表象自体が、アフリカ系アメリカ人の読者にとって蔑称のようになっている今日の状況に触れながら、トムの苦難と受容はストウ夫人が自身の経験のなかから形成した宗教観であるという指摘からはじめられた。『アンクル・トム的小屋』を読む際、注目すべき対立をテキストの引用から、“public”と“private”また“judgment”と“feeling”というキーワードによる把握の例を示し、ジェイン・トムキンズの評価を敷衍し、前者は男性人物に後者は女性人物に託されて丹念に描かれている点を示された。男性的な「法」の世界と女性的な「情」の世界を対立させることにより、当時の法と教会がとった行為、つまり、1850年の逃亡奴隷法という政治的妥協を立法化した政治と奴隷制に対しては終始口を閉ざした教会が、理想の実現を両者に求める女性の意識からは、矛盾した行為として感情的には受け入れられないものであったというコンテキストの説明が加えられた。

かつてヴィクトリア朝の偽善的上品さへの反発が起こった際に、ピューリタンの権威性のもつ偽善性がこれと混同されて批判されたという経緯にふれ、ピュータニズム自体の評価の困難さをホール教

授は、*Puritans in the New World* (Princeton: Princeton UP, 2004)で述べられている。年代的にはまさしくヴィクトリア朝期のストウ夫人の男性中心の偽善的政治・宗教への反発は、感情としての宗教心からおこったものである。一連のピューリタン批判を考えると、ストウ夫人の批判は、微妙な位置にあるように思われ興味深いものに思われた。

ホール教授がストウ夫人の宗教観で注目したのは、姉キャサリンの婚約者の死に関して生まれたと思われるピューリタニズム継承者の父親の教義への疑問であった。救済を祈る間もなく溺死したであろう婚約者の魂の苦悩を思っ悲しむ姉に対して、父の教義は何の救いも与えなかったことを示す家族の手紙の存在が示される。やがてこの苦悩は、子を病気でなくすストウ夫人自身のものとなり、父の教義への疑問は深まり、そして父への反発心となっていく過程が示唆された。父への反発が、子供を亡くし悲しみに沈むしかない奴隷の母親、そして奴隷主人の言いなりになり耐え続けることしかできないトムという人物造型を生んでいくという転化は、従順で苦悩に耐えることが、深い懷疑と怒りを象徴するという自身の経験から生まれた宗教観のあらわれであるとされた。これらの指摘は『アンクル・トム的小屋』の底流に流れるヴォイスに注目する時、政治的インパクトとは別の評価の可能性を広げるものであると思われる。

最後に『アンクル・トム的小屋』の問題点である、ストウ夫人のロマンティックな人種主義や最終章でしめされる黒人奴隷のアメリカ脱出という解決策に触れずにはすまない人種問題の根深さにふれながら、ホール教授は、こうしたテキストを授業でとりあげ学生に読ませる重要性を述べられた。質疑応答での実感も交えた丁寧な答えに、混迷するアメリカにおいて毀誉褒貶の激しいピューリタン研究を続け、vividなピューリタン像を明らかにしたホール教授の知識人としてのあり方を感じさせる講演であった。

(さくま みかよ：和洋女子大学)

スタッフ・エッセイ

関西圏の大学図書館等の視察

渡邊 貴子

大学から出張費をいただく機会に恵まれ、2006年11月30日から12月2日の日程で関西の大学図書館等を訪問し見学した。京都では京都大学附属図書館および同志社大学アメリカ研究所図書室を、奈良では、天理大学附属図書館と天理参考館、奈良教育大学附属図書館、そして奈良県立情報館を視察した。特に同志社大学アメリカ研究所図書室については、現状の詳細なお話を伺うことができ、たいへん有益であった。



天理参考館

出張に出る少し前に、アメリカ太平洋地域研究センター図書室（以下CPAS図書室）で電子資料の導入を検討するため、当センター梅崎研究員と調査を始めたところだった。今回の電子資料導入への見直しについては、当センター梅崎研究員が2000年に執筆した「アメリカ研究資料センター（CAS）活用ガイダンス——電子情報を利用した文献・資料の検索と入手」を最新の情報にすべく、アメリカの大学図書館での学術情報の入手方法との違いを議論したことがきっかけになった。CPAS図書室では、電子資料の導入がほとんど進んでいない。国立大学法人となった今も、ここはアメリカ研究の拠点であることは言うまでもない。学内に限

らず学外にも公開し、さらに学外者にも図書の貸出を実施している。真の意味でアメリカ研究の拠点であるべきCPAS図書室としては、冊子としての資料が充実していることはもちろんであるが、今後は電子資料、特に電子ジャーナルへの切り替えやオンラインで利用可能なデータベースも充実させていく必要があるのではないかと感じていた。また、CPASの助手に着任して1年が過ぎ、CPAS図書室を客観的に見たいとも同時に考え始めていた。電子資料の導入と、少し外の状況を含めて図書館をめぐる全体的な状況を知りたいことを目的に出張に行かせていただいた次第である。

ここ最近、大学図書館界でホットな話題の一つは電子ジャーナルである。特に国立大学では年々購読タイトル数が大きく増加している。国立大学図書館協議会の調査によると、2,000から2,999タイトルの外国雑誌電子ジャーナルを提供している大学が最も多い¹。電子ジャーナルの急激な増加によって、NACSIS-ILL²を連続利用している参加館での複写依頼の件数が減少するまでに影響を及ぼしているという報告もある³。今回私が訪問した同志社大学アメリカ研究所でも、すでに電子ジャーナルの購入が進み、中には電子ジャーナルのみを購入しているタイトルもあると聞いた。冊子体資料やデータベースコンテンツを見直し、現在ではコンソーシアム契約で13タイトルの電子ジャーナルを契約し、電子ジャーナルのみの契約も始めているそうだ。また、同志社大学アメリカ研究所では、すでに7年前から電子データベースの購入も始めており、そのデータベースを研究所負担で購入し全学に公開している。アメリカ研究所を持つ国内の他大学でも、同様の状況が進んでいると思われる。

天理大学附属図書館では、参考図書と一部雑誌、新聞を除く以外はすべて閉架によるサービスで、電子ジャーナルは契約していないとのことであった。天理大学附属図書館は、国宝指定の資料を6点、重要文化財指定の資料を83点所蔵する図書館で、事情は特殊ではある。それでも、

あらゆる意味で現在の大学図書館とは一線を画しているという印象を持った。

また、公共図書館ではあるが、国立情報学研究所の目録所在情報サービス⁴の参加館であり、昨秋に建て替えられたばかりの奈良県立情報館にも立ち寄った。「これが図書館？」という雰囲気建物である。夕方に訪問したのだが、建物がライトアップされ、前庭には噴水もあった。一見複合施設を思わせる建物であるが、図書館のみの3階建てである。館内には、利用申請すれば自由に使用できるパソコンが20台ほど置かれ、デジタルカメラで撮影をした画像等を編集することもできる。一般誌から一部の分野に限られるが研究紀要等に至るまで数多くの資料が配架されていた。各人が自由に読書できるスペースも多く、利用者はそれぞれの思うままに読書をしたりインターネットを利用したりしていた。館内には図書を展示できるスペースや、利用を申請すれば自由に使うことができるセミナールームや、飲食が可能な場所もあった。また夜8時まで開館しており、夜間開館が当たり前になってきた公共図書館の中でも、この時間まで開館しているところは珍しい。



同志社大学アメリカ研究所

今回訪問し、見学した各図書館はその大学の学部構成や専門分野によって、それぞれ特色や特長を持つ。これらに入館や閲覧を希望すると、身分証の提示を求めるところ求めないところそれぞれであるが、ほとんどで許可される。しかし図書館によっては、自由に本を手にとって

閲覧できなかったり、図書室にある資料やデータベースを初めとする資源を自由に利用することはできなかったり、学外利用者が図書を借りることができなかったりする。CPAS図書室では、学内、学外を問わず利用者はこれらすべてのサービスを利用可能であるが、今回視察した図書館では必ずしも当然のことではない。さらに、CPAS図書室のようにマイクロ資料を見るための別室を持ち、マイクロリーダーを2台備えることも当たり前ではない。CPAS図書室が外に開かれていることも改めて実感し、認識した。そして多くの方々の努力と尽力によって、CPAS図書室がこれまでに発展してきたことにたいしても、改めて感謝したいと思った。CPAS図書室の所蔵資料をさらに充実させ、利用される方々の便宜をますますはかりたいと思った。今後は、立ち遅れの目立つ電子資料の導入を進めていきたい。これは予算との関係もあり、現状は厳しい。しかし、その中で模索しつつ少しでも進められるよう、微力ながら努力したいと感じる視察であった。

- i 加藤信哉「総論：電子ジャーナルの現状」『情報の科学と技術』第55巻6号（2005年）242-247頁。
- ii 国立情報学研究所、目録所在情報サービス
<<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/home.html>>
（2006年1月27日参照）。
- iii 佐藤義則ほか「ILLログによる図書館関係構造の分析——大規模データに対する対応分析とクラスター分析」日本図書館情報学会『三田図書館・情報学会合同研究大会要綱』慶応義塾大学、2005-10-23-24、合同研究大会実行委員会61-64頁。

（わたなべ たかこ：CPAS助手）

東京アメリカンセンター 訪問記

森中 真弓

銀杏の葉が光り輝く昨年11月、センター長を筆頭に助教授、助手、機関研究員、科研スタッフ、司書たちが打ち揃って、CPAS（センター正式名が長いのでこの

ような呼称を使っています）始まって以来かと思われる総勢8名で、東京タワーが目前に迫る芝公園のアメリカンセンターを訪問しました。司書の私たちは日頃、それぞれの分担をこなすのに忙しく、顔を合わせて何かひとつのことを成し遂げるといったチャンスには恵まれないところから、センター長とともに他機関を訪問して半日を一緒に過ごすというのも初めてのことでした。

アメリカンセンターは在日米国大使館に所属し、広報文化交流に関するプログラムと情報サービスを提供する二つの部門を持っています。この情報サービス部門は「アメリカンセンター・レファレンス資料室」と呼ばれ、参考文献や専門資料の情報提供が行われています。東京の他に札幌、名古屋、大阪、福岡にも資料室を持っておられ、アメリカ研究者のみならずジャーナリストや広く一般の方たちに開かれたサービスを提供しています。

CPASはこちらとはお互いに利用者を紹介しあって窓口を広げたり、文献資料の寄贈を受けたり、長く交流をさせていただいています。このようにCPASの一



由利典子レファレンス資料室長(左)の説明を聞く
CPAS教員とスタッフ

部を支えてくださった「東京アメリカンセンター・レファレンス資料室」部門ですが、昨年よりサービス内容の見直しが始まり、このたび大使館内に移転されることになりました。大使館内移転後の資料室の利用については完全予約制が導入

されるとうかがっています。

私たちCPASは今までの深いお付き合いから、移転先に入りきらない貴重な資料の数々の寄贈先に指定していただきました。CPAS側でも受入スペースとの兼ね合いから、東京アメリカンセンター・レファレンス資料室蔵書の現状を見せていただくため、このように大人数での訪問を実現させたのでした。

大きなabc会館の11階のワンフロアを占めるレファレンス室は広々とした窓に囲まれ、明るく見晴らしも素晴らしく、気持のいい場所でした。私たちは蔵書を見せていただく前に、まずレファレンス室内の大きいテーブルを囲んでアメリカ



東京アメリカンセンター館長ジェフリー・ジェイムソン氏
（後列右から2番目）を囲んで

ンセンターの責任者の方の説明をうかがいました。その後ミーティングを開いて蔵書点検作業の手順を打ち合わせ、CPASの2本柱ともいえる社会科学関係と歴史関係の図書が置かれている書架に、それぞれの分野に強い先生と一緒にチームに分かれて向かいました。

1冊1冊手にとり、時には床に座り込んで読み始めたりメモを必死でとったりしているうちに、気づけば窓の外はすっかり暗くなり、夜景の美しさに私たちの疲れた目は癒されていました。数々の図書と向き合われる先生方の傍らで、私たち司書は日頃できない勉強をさせていただくことに大いに満足していました。

長い歴史を持つ「東京アメリカンセンター・レファレンス資料室」部門が移転されることは名残惜しいですが、蔵書の数々をCPASにて蘇らせていきたいと考えています。

（もりなか まゆみ：CPAS司書）

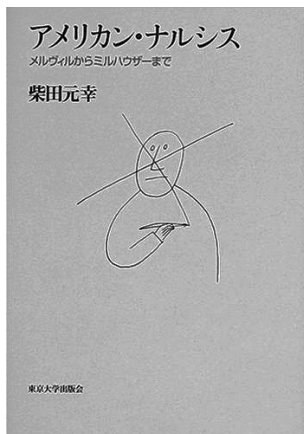
柴田元幸先生サントリー学芸賞授賞を記念して

この度、柴田元幸先生（本学大学院人文社会系研究科教授）が、本センターの「アメリカ太平洋研究叢書」の一冊である『アメリカン・ナルシス——メルヴィルからミルハウザーまで』（東京大学出版会、2005年）によって第27回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）を受賞されました。本号では、受賞を記念して柴田先生にエッセイをご寄稿いただきました。

特別寄稿：現代日米の文学

柴田 元幸

特別研究休暇なるものを文学部からいただき、3か月間、ハーバード大学近辺に滞在した。その間、多くの作家と会って話す機会を得て、現代文学を専攻する人間としてはありがたい限りだったし、加えて何度か講演もやらせてもらって（カリフォルニアのポモナ大、ニューハンプシャーのダートマス大、そしてハーバード）、聴衆から活発なフィードバ



ックが得られたのも大きな収穫だった。

講演の主たるテーマは、そしてこれは作家たちと会うときにしばしば話題にしたテーマでもあるのだが、現代アメリカ小説と現代日本小説の共通点と相違点。1990年代前半あたりまで、アメリカ文学はリアリズムに根ざし、ひとまず現実の枠内にとどまった小説が多く書かれていたが、一方日本文学は、村上春樹や小川

現実から幻想へと比較的容易に移行する作品が多かった。ところが、90年代後半から21世紀に入ると、アメリカでも、幻想へいとも簡単に移行する作品が多く書かれるようになり、一見現実的な世界を描いているように見える作品でも、幻想性を色濃くはらんだ作品が増えてきた。

言いかえれば、小説を書くという営みが、外の社会に目を向けるにせよ、自分の過去を再現するにせよ、とにかく基本的にいわゆる現実を描くという行為と捉えられがちだったのが、アメリカでもだんだん、日本と同じように、己の妄想に沈んでいく行為と捉えられるようになってきている、と言ってもいい。具体的には、ケリー・リンク、エイミー・ベンダーといった若手女性作家たちにそうした傾向が強く、彼女たちの作品を読んでいると、ときに川上弘美や小川洋子の作品を読んでいるような錯覚を覚える。そういう意味では、あたかもアメリカ文学が日本文学に「追いついてきている」ような印象を受ける。現在のアメリカでの村上春樹人気も、そうした印象をいっそう強めている。

なぜ、アメリカ文学も日本文学と同じくらい幻想性が強まっているのか。正直言って、その理由はよくわからないし、個人的にあまり興味もない。僕にできるのは、小説がこういうふうに変わってきています、という事実を指摘することだけであって、それを生み出した背景なり現実との関連なりについては、小説よりも現実世界に興味のある人たちが考えてくれればいいと思っている。しいていえば、これはほかのところでも書いたことだが、現在40代より下の若手・中堅作家たちに関する限り、子供のころからポップ・カルチャーを吸収して育っていて、あたかも無意識がポップ・カルチャーを素材として成り立っているように思えるという点では——素材の具体的中身は違うにせよ——日米共通していて、それが幻想性につながっているのだらうかとは思ふ。

では、両国の文学の、現在における相違点は何か。これは簡単。日本の小説が、村上春樹や、あるいはたとえば吉田修一に典型的に表われているように、基

本的に都会に一人で住む人間の話が多いのに対し、幻想性がとみに増してきている、アメリカの現代作家たちは1980年代の多くの小説同様「家族」に執着している。すでに名を挙げたケリー・リンク、エイミー・ベンダー、あるいはジェフリー・ユーージェニデスといった1990年代～2000年代に登場した作家たちの多くが、家族を核にして物語を紡ぎ出している（これについては、ケリー・リンクにも直接指摘したところ、全面的に同意してくれた。無意識がポップ・カルチャー云々についても同じ）。この違いは大きい。

しかもアメリカ文学といえば、元来、『白鯨』『ハックルベリー・フィンの冒険』などの例を挙げるまでもなく、基本的には孤児の文学だった。それが近年、家族への執着が強まっているのである。これはどうしたことか。

これについても、「なぜ」を言い出すと、にわかエセ社会学者になってしまいそうで、あまり断定はしたくないのだが、ひとつには、いかにも素人臭い物言いで気が引けるのだが、現代アメリカでは、自動車がないと（特に子供は）どこへも行けない、という事実がかなり影響しているのではないか。

たとえば僕が訳している作家の一人ポール・オースターは、今回会って話したとき、「1950年代、60年代は、子供が自分たちだけで街をさまようことができた。いまの子供はそれができない」と言っていたし、やはり僕が訳している作家スチュアート・ダイバックも、1950～60年代に過ごした少年時代をふり返って、あのころは街（ストリート）が子供に学校や家庭生活に変わるオルターナティブ・ライフを与えてくれた、と書いている。今回ハーバードで、50年代のニューヨークを舞台に子供たちが親から離れて街をさまよう *Little Fugitive* (1953) という素晴らしい映画を見たこともあって、個人的にそうした印象を強く抱いた。

一方現代では、ハロウィーンのtrick or treatでも、子供たちは親に付き添われて近所を回るしかない。地方では自動車がなければ日々どこへも行けないし、都会

では自動車がなくてもある程度動くことは可能だが今度は危険すぎてやっぱり子供だけではほとんどどこへも行けない(ジョナサン・リーセムの*The Fortress of Solitude*は、街に危険が満ちはじめた70年代に生きる少年たちが、街に対して感じる恐怖と魅惑をあざやかに描いている)。どのみち子供は、stuck with their parentsという感じに見える(こういう見方は、短期間の滞在のなかの部分的体験から外国人が一般論を導き出してしまうという、よくある愚を犯しているのかもしれないが、いろんな人と話してもまあだいたい同意してもらえた)。

そして、アメリカ作家が家族に執着する、というとき、その場合の「家族」とは、むしろ自分が属している、というか

縛りつけられている現実の家族を指しもあるのだが、現実と理想とがつねに二重写しになっているのはアメリカの常、ここでも、自分たちが現実には実践できていないけれど理念的には実践すべき「理想の家族」像も見え隠れしている。要するに、たとえば家族の不幸を描いても、つねにその不幸を、どこかで完璧に幸福な家族像と照らし合わせて描いているのである。そしてその完璧に幸福な家族像とは、『パパは何でも知っている』をはじめ、1950年代のメディアが作り出したものである度合は相当大きいように思える。実はこれこそ、アメリカ人聴衆の前でこうした話をしてつねに一番「盛り上がった」話題でもある。*The Way We Never Were*という研究書まであるくらい

で、幸福なアメリカン・ファミリー像は実は虚像にすぎないのだという思い、にもかかわらずその虚像に自分たちが依然として呪縛されているのだという思いは相当に強い。そうした反応を彼らから引き出ただけでも、つたない英語で喋った甲斐があったと思った。

それに較べ、日本では子供は比較的親から離れて動くこともでき、自由に街をさまよえる……と思いながら十二月に日本に帰ってきたら、まさにそうした子供たちが狙われた陰惨な事件が続けて起きた。弱者切り捨て、国際的独善、等々、いまの日本はアメリカの最悪の面ばかり模倣しているように思えるが、こんな面まで模倣してしまっているのだろうか。

(しばた もとゆき: 東京大学)

2005年度研究活動報告

I. 研究セミナー

テーマ	講師(所属機関)	司会	期日	共催者
A Special Preview of DiscoverNikkei.org: A Global Website for Nikkei-related Resources and Discussions	Akemi Kikumura-Yano (Senior Vice President, Japanese American National Museum), Yoko Nishimura (Project Coordinator of the Nikkei Legacy Project)	飯野正子 (津田塾大学)	2005.5.30	アメリカ学会 移民研究会
Experimental Creative Writing	Robert Coover (Brown University)	佐藤良明	2005.6.1	アメリカ学会
The Role of Giving in American Democracy	Olivier Zunz (University of Virginia)	西崎文子 (成蹊大学)	2005.6.14	アメリカ学会 基礎研究(A)「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」
The Rise and Fall of Black Internationalism in Asia: Black Americans, Japan, and China, 1900-1945	Marc Gallicchio (Villanova University/琉球大学フルブライト招聘教授)	能登路雅子	2005.6.22	基礎研究(A)「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」 アメリカ学会 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」
Yilpinji: Love, Art & Ceremony: The Theme of Transgressive Love in Australian Aboriginal Visual Art	Christine Judith Nicholls (CPASオーストラリア客員教授)	能登路雅子	2005.6.28	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻
「日米関係と比較文学」	佐伯彰一 (東京大学名誉教授/世田谷文学館館長)	菅原克也	2005.7.16	東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化研究室 東大比較文学会 アメリカ学会
Huagong and Huashang: Chinese Coolies and Shopkeepers in Latin America and the Caribbean	Evelyn Hu-DeHart (Brown University)	矢口祐人	2005.7.20	基礎研究(A)「アジア系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」 アメリカ学会
Patterns of Urban and Suburban Growth in the United States, 1800-2000	Kenneth T. Jackson (Columbia University)	能登路雅子	2005.7.28-29	上智大学アメリカ・カナダ研究所 日米教育委員会 アメリカ学会
Probationary Americans: How Contemporary U.S. Immigration Policies are Reshaping the American Society	Edward J. W. Park (Loyola Marymount University/東京大学・日本女子大学フルブライト招聘教授)	能登路雅子	2005.12.20	アメリカ学会 日米教育委員会
Text and Context in H. B. Stowe's <i>Uncle Tom's Cabin</i>	David D. Hall (Harvard University)	遠藤泰生	2006.1.11	上智大学アメリカ・カナダ研究所 初期アメリカ学会 キリスト教と文化研究所
人種・民族・グローバルヒストリー: アメリカ史をひらく Putting the United States into World History Putting the United States into Hemispheric History	Thomas Bender (New York University) Gary Gerstle (University of Maryland)	遠藤泰生	2006.3.10	アメリカ学会 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」

II. シンポジウム

◆CPAS International Symposium 2005 The World of Transnational Asian Americans 「越境するアジア系アメリカ人の世界」

主催：アメリカ太平洋地域研究センター、文部科学省
科学研究費補助金基盤研究（A）「アジア系ア
メリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」
後援：文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）「ア
ジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」、
21世紀COE「共生のための国際哲学交流セン
ター」、アメリカ研究振興会、東京大学大学院
総合文化研究科地域文化研究専攻

<公開シンポジウム>（同時通訳つき）

日時：2005年9月3日（土） 14：00—17：00

会場：東京大学駒場キャンパス 18号館ホール

プログラム：

司会…瀧田佳子

（東京大学大学院総合文化研究科 教授）

挨拶…山本泰

（東京大学大学院総合文化研究科 副研究科長）

報告…

●油井大三郎

（東京大学大学院総合文化研究科 教授）

「環太平洋のひとの移動—その過去と現在」

●Henry Yu

（UCLA歴史学部/ブリティッシュ・コロンビア大学
歴史学部 助教授）

“Then and Now: Comparing Contemporary
and Historical Asian Migrants”

●吉原和男

（慶応大学文学部 教授）

「東南アジアからの中国系新移民
—その環太平洋ネットワーク」

●Eui-Young Yu

（カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校社会学部、
コリアンアメリカン/ コリア研究センター教授）

“Changing Dynamics of the Korean
Community in the US, 1990-2000”

コメンテーター…能登路雅子

（東京大学アメリカ太平洋地域研究センター長）

<専門家会議>（英語）

日時：2005年9月4日（日） 10：00—16：30

会場：東京大学駒場キャンパス

18号館コラボレーションルーム

プログラム：

Morning Session:

Asian American Immigrants and Boundaries of
Race

Chair: Yasuo Endo (University of Tokyo)

Panelists:

●Robert Lee (Brown University)

“Christian or Heathen? Late-19th Century
Chinese American Intellectuals’ Debate:
Religion, Social Ethics and Modernity”

●Eiichiro Azuma (University of Pennsylvania)

“A Trans-border Japanese Immigrant
Community in U.S. and Mexican
Californias”

●Izumi Hirobe (Hokkaido University)

“Naturalization Cases of Asian Immigrants”

Commentator: Evelyn Hu-DeHart (Brown University)

Afternoon Session:

New Asian American Communities and Identities

Chair: Yujin Yaguchi (University of Tokyo)

Panelists:

●Mari Sekiguchi (Asia University, Adjunct)

“‘American Desi’: Multiple Identities
among Contemporary Asian Indians”

●Hideki Harajiri (Shizuoka University)

“Meanings of Modern and Post-modern
Phenomena: Formation of Trans-national
Communities of Korean-Chinese”

●Miya Suga (Tokyo Gakugei University)

“Diversity within ‘Nikkei’: the Demographic
Background and Multiple Identities of the
‘Japanese Population in the U.S.’”

●Hiroko Furuya (Research Fellow, JSPS)

“Being American is to be Vietnamese:
Remittances, Homeland Travel, and
Anti-communist Activities”

Commentator:

Edward J. Park (Loyola Marymount University)

◆2005年日豪シンポジウム

Japan, Australia and the Changing Asia
Pacific Region: Prospects for Peace,
Prosperity and Regional Integration

「アジア太平洋地域の変容と日本・オーストラリア」

日時：2005年12月3、4日

場所：東京大学教養学部（駒場）18号館ホール

主催：東京大学大学院総合文化研究科2005年日豪
シンポジウム実行委員会

東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ
太平洋地域研究センター

後援：りそなアジア・オセアニア財団、豪日交流基
金、一高記念基金

プログラム：

開会挨拶：木畑洋一

（東京大学大学院総合文化研究科長）

挨拶：Leonie Bostel（豪日交流基金事務局長）

12月3日（土）

セッション1：Overcoming New Crises

●Lily Rahim（シドニー大学）

“Southeast Asia and the War on Terror:
Emerging Shifts in Geopolitics and
Security Architecture”

●Rodney Tiffen（シドニー大学）

“Media and Democracy in an Age of
Terrorism”

●藤原帰一（東京大学）

“The Taming of Raging Bulls: North Korea,
the United States and Northeast Asian
Security”

ディスカッサント：茂田宏

（東京大学、元駐イスラエル大使、元国際テロ対策担当大使）

セッション2：Reforms and Developments

●Peter King（シドニー大学/ライデン大学）

“Japan, Australia and *Disintegrasi* in Indonesia”

●Edward Aspinall（オーストラリア国立大学）

“Prospects for Peace in Aceh”

●中西徹（東京大学）

“The Emergence of a Community among
the Urban Poor: Metro Manila”

ディスカッサント：加納啓良（東京大学）

12月4日（日）

セッション3：The Future of Regional Cooperation
and Integration

●Rawdon Dalrymple

（シドニー大学、元駐米・日・インドネシア大使）

“Japan, Australia and the Movement for
East Asian Solidarity”

●Richard Tanter（ノーティラス研究所）

“After Hegemony: Japan, China and New
Approaches in East Asian Security”

●菊池努（青山学院大学）

“Asians in Search of a Region: Discourse
and Quality of Cooperation in East Asia”

ディスカッサント：山影進（東京大学）

セッション4：総括セッション

III. 研究プロジェクト

●文部科学省研究費補助金・基盤研究(A)(1)「アジア
系アメリカ人の越境と文化混合に関する比較研究」

（代表：油井大三郎）

●文部科学省研究費補助金・基盤研究(A)(2)「アジ
アにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」

（代表：能登路雅子）

●21世紀CEOプログラム「共生のための国際哲
学交流センター」への協力

IV. 出版活動

●講座「変貌するアメリカ太平洋世界」全6巻（彩流社、
2004-5年）

1巻 遠藤泰生・油井大三郎編『太平洋世界の中
のアメリカ——対立から共生へ』（2004年）

2巻 五十嵐武士編『太平洋世界の国際関係』
（2005年）

3巻 山本吉宣編『アジア太平洋の安全保障とア
メリカ』（2005年）

4巻 松原望・丸山真人編『アジア太平洋環境の
新視点』（2005年）

5巻 庄司興吉編『情報社会変動のなかのアメリカ
とアジア』（2004年）

6巻 瀧田佳子編『太平洋世界の文化とアメリカ
—多文化主義・土着・ジェンダー』（2005年）

●柴田元幸『アメリカン・ナルシス——メルヴィル
からミルハウザーまで』アメリカ太平洋研究叢書
東京大学出版会（2005年）。

●Daizaburo Yui, ed. *The World of Transnational
Asian Americans*. Center for Pacific and
American Studies, 2006.

●『CPAS Newsletter』Vol.6, No.1（2004年10月）、
No.2（2006年3月）。

●『アメリカ太平洋研究』第6巻、2006年3月。

V. センター所属教員の本年度の 研究活動

◆能登路雅子

共編著

●「概説」1-24頁（有賀夏紀と共著）、「大量生産
とアメリカ文化」106-117頁、「日常生活を変えた
自動車と映画」164-175頁、「ミッキーマウス
登場から白雪姫まで：初期ディズニー映画の進化
と影響力」241-252頁、「ボーイスカウトと愛
国主義」284-296頁を分担執筆、有賀夏紀、能登
路雅子編『史料で読むアメリカ文化史4 アメリ
カの世紀1920年代—1950年代』東京大学出版会
（2005年12月）総351頁。

分担執筆

●「日米文化教育交流会議（カルコン）の成果と課題」
瀧田佳子編『太平洋世界の文化とアメリカ：多文
化主義・土着・ジェンダー』彩流社（2005年2月）、
163—184頁。

●「人格形成と野性への志向：ボーイスカウト」綾
部恒雄編『クラブが創った国アメリカ』山川出版
社（2005年4月）、188-201頁。

雑誌論文

●「ディズニーの帝国：アメリカ製テーマパークの
文化戦略」『立教アメリカン・スタディーズ』立
教大学アメリカ研究所（2005年3月）、25-40頁。

辞典・事典項目執筆

●「アメリカへの移民」猪口孝他編『国際政治事典』
弘文堂（2005年12月）、48-50頁。

学会

- CPAS国際シンポジウム「越境するアジア系アメリカ人の世界」、東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター、東京、2005年9月3日、コメンテーター。

招待講演

- フェリス女学院大学英文学会講演「ファンタジーを読む：ウォルト・ディズニーの世界」、フェリス女学院大学、2005年10月、講演。

◆油井大三郎

編著

- 「世界戦争の中のアジア太平洋戦争」を分担執筆、油井大三郎他編『岩波講座アジア・太平洋戦争』第1巻、岩波書店（2005年11月）、235-274頁。

分担執筆

- 「日米関係の現在と未来」東京大学教養学部編『16歳からの東大冒険講座』第2巻、培風館（2005年）、70-93頁。

辞典・事典項目執筆

- 「アメリカ合衆国」猪口孝他編『国際政治事典』、弘文堂（2005年）。

その他

- 「現実主義外交の提唱者」『日本経済新聞』2005年3月19日。
- 対談、中村政則・油井大三郎「戦後60年——どんな転換点なのか」『世界』2005年1月。

学会報告

- "Roundtable on East Asian Networks of American Studies," The 49th Annual International Conference of the American Studies Association of Korea, Gyeongju, Korea, October 30, 2005, English.
- 福岡大学七隈史学会年次大会、基調講演「第二次世界大戦の記憶とその日米ギャップ」福岡、2005年9月24日。
- 東京大学大学院総合文化研究科地域文化専攻など、「和解のための歴史を求めて—ヨーロッパとアジア」、駒場、東京、2005年11月5日、コメンテーター。

◆小寺彰

論文

- 「投資協定仲裁の新たな展開とその意義」RIETIディスカッションペーパー 05-J-021, <http://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/05j021.pdf> (2005年)。
- 「経済連携協定の意義と課題」『法律時報』2005年6月号。
- 「国際法判例の動き」『ジュリスト』1269号（2005年）。
- 「大使館に対する課税免除」『国際社会科学』54号（2004年）。
- 「貿易・投資分野における国際紛争処理の新次元」『ジュリスト』1299号（2005年）。
- 「自由貿易協定と知的財産権」相澤他編『知的財産権の理論と現代的課題（中山信弘先生還暦記念論文集）』弘文堂、（2005年）。

共編著

- 『国際条約集2005年版』有斐閣（2005年）。

書評

- 「荒木一郎・川瀬剛志編『セーフガード』」『日本国際経済法学会年報』14号（2005年）。

発表

- "The General Nature of Japan's Economic Partnership Agreement and East Asian Community," WTO Network Seoul Conference, April 25, 2005.
- 「紛争処理の目指すもの」RIETI政策シンポジウム「難航するWTO新ラウンドの打開に向けて：多角的通商体制の基本課題と我が国の進路」2005年7月22日。
- "What are the Obstacles of the DDA and How can We Overcome?" WTO at Ten Conference, October 26th, 2005.

◆遠藤泰生

編著

- 「概説」13-44頁、「黒人 種奴隷制度の成立——1705年ヴァージニア植民地議会、奉公人と奴隷に関する法律」、167-180頁を分担執筆、遠藤泰生編『史料で読むアメリカ文化史1 植民地時代15世紀末—1770年代』東京大学出版会（2005年10月）、総387頁。

分担執筆

- 「国民になる方法—1775年連邦帰化法」荒このみ編『史料で読むアメリカ文化史2 独立から南北戦争まで、1770年代—1850年代』東京大学出版会（2005年10月）、56-68頁。

その他

- 「温かな瞳の人」『比較文学研究』86号（2005年11月）、147-149頁。
- 「アメリカの解体とアメリカ研究の解体」『英文学研究』第82巻（2005年12月）、316頁。

発表

- "American Empire: Past and Present," New Research Initiatives in Humanities and Social Sciences, Japan Society for the Promotion of Science, Tokyo, March 12, 2005, Chair & Discussant.
- 「2005年の今、文学部英文学科で“アメリカ文学・文化”をどう教えるか」日本英文学会、日本大学文理学部、2005年5月22日、発表。
- 「立命館京都アメリカ研究セミナーの10年」立命館大学アメリカ研究センター、キャンパスプラザ京都、2005年10月21日、ディスカッサント。

◆岡山裕

著書

- 『アメリカ二大政党制の確立—再建期における戦後体制の形成と共和党』（東京大学出版会、2005年6月）。

分担執筆

- 「政党」久保文明編『アメリカの政治』（弘文堂、2005年12月）、114-133頁。

辞典・事典項目執筆

- 編集協力および「アメリカ合衆国憲法」「南北戦争」等14項目、猪口孝他編『国際政治事典』弘文堂（2005年12月）。

発表

- "Waiting for Policy Expertise: Institutional Choice and the Shaping of the U.S. Interstate Commerce Commission," Annual Meeting of the Midwest Political Science Association, April 7-10, The Palmer House Hilton, Chicago, Illinois, U.S.A.
- "The Scope of Morality in American Political Development," Comment on the keynote speech by James A. Morone (Brown University), Kyoto American Studies Summer Seminar, Ritsumeikan University, Kyoto, Aug. 1-3, 2005.
- "Paving the Way for Policy Experts: Historical Constraints on Institutional Choice and the Making of the U.S. Interstate Commerce Commission," Annual Meeting of the American Political Science Association, Sept. 1-4, Marriott Wardman Park, Washington, D.C., U.S.A.

その他

- 討論、日本政治学会年次大会、分科会L「政策史と制度史の射程」明治大学、2005年10月2日。
- 発表、「民主政が政策専門性を導入するとき—19世紀末アメリカにおける独立行政委員会制の設計過程」東京大学法学部政治史・比較現代政治研究会、2005年10月22日。

◆渡邊貴子

その他

- 「大学図書館における電子資料の現状」『アメリカ太平洋研究』6号（2006年3月）。

◆梅崎透

その他

- 「アメリカ研究における電子データベースの利用とデジタル化の現在」『アメリカ太平洋研究』6号（2006年3月）。

発表

- 「キューバ革命とニューヨーク・ラディカリズムの再編—アメリカ『60年代』論の再考にむけて」日本アメリカ史学会年次大会、関西学院大学、2005年9月17日。

講演

- 「アメリカ留学へのアドバイス—準備編・実践編」東京学芸大学、2006年1月17日、24日。

来客の紹介

◆2005年12月9日、豪日交流基金より前事務局長レオニー・ボクステル氏と新事務局長ルーシー・キング氏が来訪された。



写真前列左からボクステル氏、CPASオーストラリア客員教授レス・テリー氏、ルーシー・キング氏、能登路センター長、後列右より森中司書、エリス教授、遠藤教授、梅崎研究員。CPAS図書室で渡邉助手が写す

◆2005年12月12日、アメリカ研究振興会より嘉治元郎先生、佐藤宏子先生、有賀貞先生が来訪。



写真前列左より有賀先生、嘉治先生、佐藤先生、後列左より能登路センター長、遠藤教授

◆2006年1月31日、在日米国商工会議所会頭チャールズ・D・レイク・II氏が来訪。



写真前列左より能登路センター長、レイク氏、後列岡山助教授、小寺教授

外部評価実施のお知らせ

◆東京大学附属アメリカ太平洋地域研究センターでは、外部評価委員会を組織し外部評価を実施しております。結果は2005年度3月に報告書としてまとめられる予定です。

外部評価委員

大塚寿郎先生（上智大学アメリカ・カナダ研究所所長） 小林憲二先生（立教大学アメリカ研究所所長）
デビッド・サターホワイト氏（日米教育委員会事務局長） レオニー・ボクステル氏（前豪日交流基金事務局長）
和久本芳彦先生（東京大学大学院経済学研究科COE特任研究員、元国際交流基金日米センター長）



2005年12月16日に開かれた外部評価委員会会議の様子

CPASスタッフ紹介

◆研究部門

教授 能登路雅子（センター長）
教授 油井大三郎
教授 小寺 彰
教授 遠藤泰生
助教授 岡山 裕
客員教授 Leslie John Terry
研究機関研究員 梅崎 透

◆情報基盤部門

助手 渡辺貴子
司書 森中真弓
司書 岡崎真弓
司書 中田恵子

◆事務局

事務主任 松井由美子
科研スタッフ 廖 利加子



前列左から：遠藤、能登路、油井、渡邉
後列左から：森中、梅崎、岡山、松井、廖、岡崎
列外左から：小寺、中田

アメリカ太平洋地域研究センター運営委員会（2005年度）
大学院総合文化研究科・教養学部

（センター長・運営委員長）	能登路 雅子	教授
（副研究科長）	山本 泰	教授
（言語情報科学専攻）	西中村 浩	教授
（言語情報科学専攻）	林 文代	教授
（超域文化科学専攻）	三角 洋一	教授
（超域文化科学専攻）	高田 康成	教授
（地域文化研究専攻）	大貫 隆	教授
（地域文化研究専攻）	村田 雄二郎	教授
（国際社会科学専攻）	石井 明	教授
（生命環境科学系）	友田 修司	教授
（相関基礎科学系）	岡本 拓司	助教授
（広域システム科学系）	谷内 達	教授
（委嘱委員）	木村 秀雄	教授
（センター）	油井 大三郎	教授
（センター）	小寺 彰	教授
（センター）	遠藤 泰生	教授
（センター）	岡山 裕	助教授
大学院法政政治学研究科	五十嵐 武士	教授
	寺尾 美子	教授
大学院人文社会系研究科	上野 千鶴子	教授
	平石 貴樹	教授
大学院経済学研究科	石原 俊時	助教授
	大森 裕浩	助教授
大学院教育学研究科	矢野 真和	教授
社会科学研究所	Noble, Gregory	教授
情報学環・学際情報学府	田中 秀幸	助教授

以上26名

CPAS ニュースレター Vol. 6 No.2

平成18年3月20日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科附属

アメリカ太平洋地域研究センター

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6137 FAX 03-5454-6160

http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/

編集：岡山裕（編集長）梅崎透

制作：JTB印刷株式会社

〒171-0031 東京都豊島区目白2-1-1

TEL 03-5950-2221 FAX 03-5950-3755